医師の言葉

小野みどり

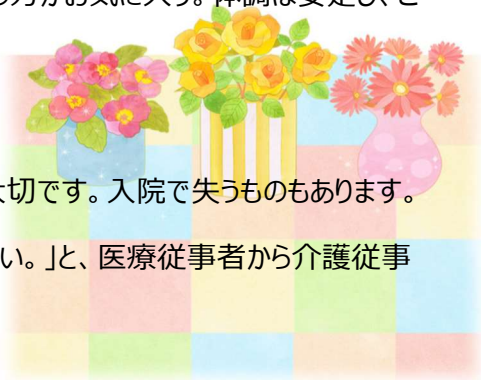
Ｔさんの入院に付き添った時のこと。

コロナ検査用の防護服に身を包まれた医師が、「誰かわからないでしょうが」と切り出された。「よく、入院したら安心と言われますが、入院治療の過程で心配なことが二つあります。一つめはフレイル。運動不足です。一日寝ると零点五歳、歳をとると言います。十日入院したとすれば、五歳です。二十歳の人なら二十五歳ですが、Ｔさんは九十五歳ですから百歳になります。歩けなくなる可能性もあります。二つめは幻覚妄想です。特に今はコロナ禍ですから、家族に会えません。狭い病室に閉じ込められているように思われる方がいらっしゃいます。僕も、普段はおとなしい女性にすごい力で殴られたことがあります。Ｔさんも以前の入院の時、幻覚妄想がありました。奥さんの顔を見ると落ち着かれましたが。今回、状況によっては退院していただくことになります。とりあえず、今日から入院していただき、僕たち医療従事者は命を助けることをします。」

二週間後、治療を終えたＴさんに退院許可が出た。入院期間が短かったこともあり、問題行動はなかったという。カンファレンスの席で医師から、「病状はお薬でコントロールできることがわかりました」と説明があり、家に帰ってからの指示が出た。薬をきちんと服用すること。塩分と水分は控えること。毎日体重を測ること。

プランを直し、在宅サービスを再開。薬は薬剤師さんがお薬カレンダーに入れて管理、体重は訪問看護師さんとヘルパーさんがカレンダーに書き入れることにした。高齢の奥さんの負担を増やしたくはない。

Ｔさんは、慣れ親しんだ家の中、車いすを乗りこなして動かれる。排せつは家のトイレとポータブルトイレを使い分け。食べたいものは奥さんに伝え、奥さんは塩分控えめを心がけられる。住宅改修で浴室に手すりを設置したけれども、ヘルパーさんの足浴の方がお気に入り。体調は安定し、ご機嫌も良い。

家がええ、もう入院はしないと言われる。

医師の言葉を思い出す。「患者さんは心身のバランスが大切です。入院で失うものもあります。お家でできることをお伝えしますから、環境を整えてみてください。」と、医療従事者から介護従事者に投げられたように思えるのである。